

群馬県出土の二重口縁壺

新 山 保 和

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

- | | |
|----------|-----------|
| 1. はじめに | 3. 事例分析 |
| 2. 問題の視座 | 4. まとめと展望 |

— 要 旨 —

古墳祭祀を考える上で重要な遺物に、二重口縁壺が挙げられる。二重口縁壺は、弥生時代後期においては、他の壺や甕、高坏などと同様に扱われており、特殊な存在ではない。しかし、その後の展開を見ると、二重口縁壺は桜井茶臼山古墳、東殿塚古墳、三国の鼻古墳、青塚古墳などに見られるように、埴輪と同様な役割を果たすようになる。これは全国的な傾向と言える。昨今の研究では、冪繞という要素に注目し、二重口縁壺を埴輪祭式の中に組み込む傾向にある。畿内に出自を持つ二重口縁壺は、前期古墳に冪繞され、埴輪と同様な役割を果たしている。この点を重視すると、墳丘における二重口縁壺の冪繞に古墳出現の画期を見いだすことができる。では、どの段階から二重口縁壺は他の供献土器から逸脱し、埴輪と同じ役割を果たすのだろうか。本稿では、まず最初に混乱している二重口縁壺と壺形埴輪の概念について整理し、筆者の立場を明らかにする。その後、群馬県における墳墓出土の二重口縁壺を集成し、系統ごとに分類を行った。その結果、二重口縁壺には畿内系、伊勢型、パレス壺系の3系統が存在し、それぞれが影響し合いながら系統内に複数の類型を内包していることを明らかにした。また、二重口縁壺と壺形埴輪の境界条件は胎土にあり、胎土が共伴する土師器と同じものは二重口縁壺であり、埴輪質のものは壺形埴輪と呼ぶべきことを提案した。

キーワード

対象時代 古墳時代

対象地域 群馬県

研究対象 二重口縁壺

1. はじめに

古墳の出現について考えるとき、墳墓から出土する土器群は、古墳の成立を考える重要な手掛かりとなる。墳墓から出土する土器群は、その用途が祭祀に限定されたものであり、そこには古墳成立期の葬送観念の一端が垣間見える。弥生時代から古墳時代に移行する時期は、墳墓祭祀に用いられた土器群の様相に地域性や器種の多様性がうかがえる。その様相を整理・分類することで古墳成立期の解明の糸口が見つかると考えられる。墳墓祭祀に用いられる土器の中で、近年最も研究が活発に行われている対象が壺形土器、二重口縁壺である。関東における二重口縁壺の研究は、大きくわけて「冨縄配列」などの出土位置に注目する研究（塩谷1983、古屋1998）と、形態変化や系統についての研究（利根川1993・1994、比田井1995、君島2000）に大別できる。本稿では、群馬県出土における墳墓出土の二重口縁壺を対象として、二重口縁壺から埴輪への変遷について考えていきたい。

2. 問題の所在

二重口縁壺を検討するにあたり、2つの点が問題点とてあがってくる。一つは二重口縁壺と壺形埴輪の境界と、もう一つは何を持って二重口縁壺と呼ぶかという名称の概念規定についてである。前者は、この境界を設定することで、土器祭式から埴輪祭式に変わる画期を見いだせることから、古墳成立期の意識変革を理解できる。後者は、二重口縁壺の分類基準と関連し、そこから派生する系統論に関わる問題を内在している。これらの問題点について、筆者の見解を述べた後、群馬県出土の二重口縁壺を集成・分類し、具体的な事例を挙げて検討を加えていきたい。

2-1 二重口縁壺と壺形埴輪の関係

二重口縁壺の研究を整理すると、古式土師器と埴輪祭式の2つの側面からのアプローチが行われている。このアプローチの違いにより、古墳出土の二重口縁壺を位置付けるにあたり、それが二重口縁壺なのか、壺形埴輪なのか研究者の判断が分かれるところである¹⁾。大まかな方向性として、底部穿孔など本来の機能を消失する中であくまで土器の中に位置付ける見解（古式土師器）と、規格性と冨縄配列を根拠に埴輪の中に位置付ける見解（埴輪祭式）に分けられる。筆者はかねてから土器祭祀から埴輪祭祀に転換するプロセスに興味があり、弥生時代からの伝統的な土器祭祀が古墳における埴輪祭祀に転換・統合される過程を解明することで、古墳成立を考える重要な手がかりを得られると考えているので、今回は両者の境界を明確にする目的で分類を行う。

二重口縁壺と壺形埴輪の違いを土器の立場から見ると、二重口縁壺は集落からも出土するが、埴輪は転用

目的以外では集落から出土しない。この点が最も両者の異なる点である。前提条件として、古墳から出土する二重口縁壺を埴輪と識別するには、集落から出土する二重口縁壺との境界条件を把握する必要がある。底部穿孔もその条件の一つであるが、すべての二重口縁壺に底部穿孔が施されないことや、二重口縁壺以外の器種にも底部穿孔が施されることなどから、十分条件であり必要条件にはなりえない。では、何が境界条件となろうか。筆者は、胎土を重視する必要があると考えている。簡潔に述べるならば、二重口縁壺と共伴する土器と類似する場合は土器、埴輪に近い胎土や色調の場合は埴輪と識別するべきと考えている。

次に、二重口縁壺が出土している墳墓の事例を挙げて検討していく〔図1〕同一遺跡から土師質と埴輪質の二重口縁壺が出土している事例としては、下郷遺跡 SZ01・SZ42が挙げられる。

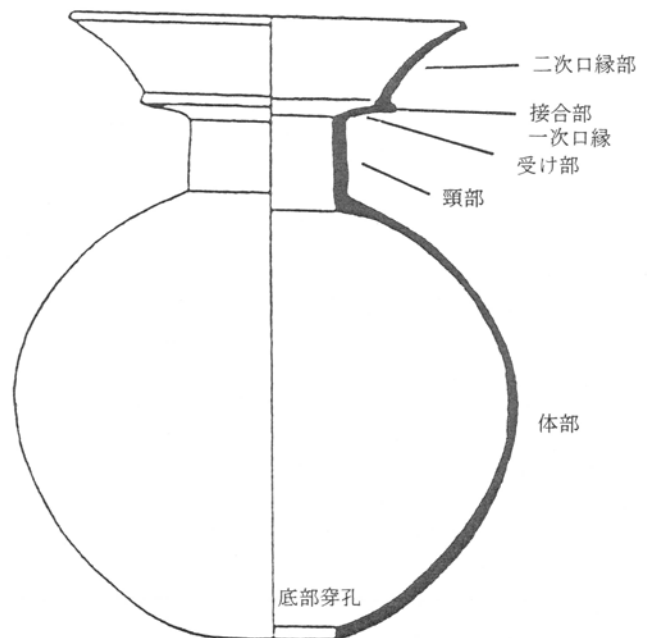


図1 部位の名称

下郷遺跡 SZ01出土の二重口縁壺を見みると、2種類のタイプが出土している〔図2〕。報告書に掲載されている8点の二重口縁壺を見ると、図2-1～7の壺は器高に対して口縁部高が低く、受け部が水平方向に突出して平坦面を形成する。図2-8の壺は、頸部が緩やかに外反し、受け部に平坦面を形成しない。口縁部と体部が1：2の比率を呈し、頸部に閉塞感は感じられない。この8点の二重口縁壺のうち、1点〔図2-8〕のみ調整と器形が異なり、胎土が埴輪質であることが指摘されている。土師質と埴輪質の二重口縁壺の相違点を見ると、7点の土師質二重口縁壺の底部が焼成後穿孔〔図2-1～7〕であるのに対して、埴輪質の二重口縁壺1点のみ焼成前穿孔である。外面調整を見ると、土師質の二重口縁壺が

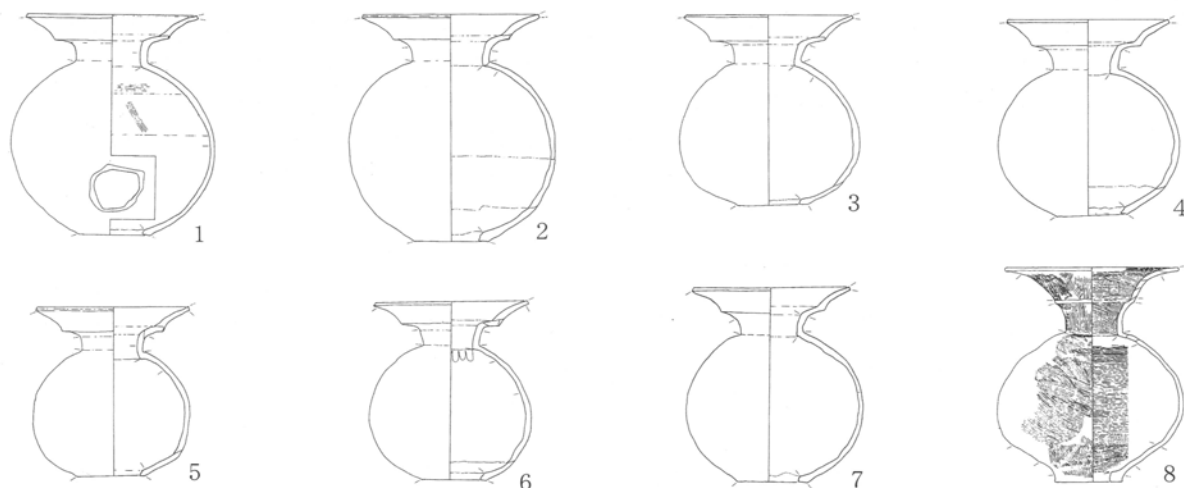


図2 下郷遺跡 SZ01 (S=1/10)

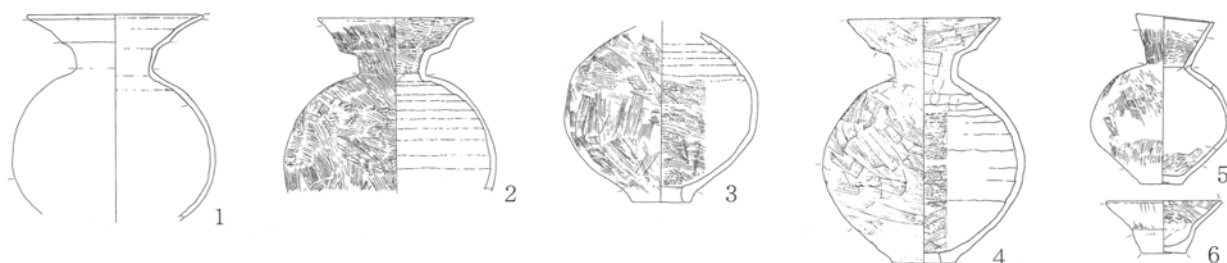


図3 下郷遺跡 SZ42 (S=1/10)

ヘラミガキ調整を施すのに対して、埴輪質の二重口縁壺のみがハケ調整を施す。他の共伴土器を見てみると、ハケ調整を施す壺が他に3点あり、そのうち2点の胎土が埴輪質を呈している。胎土で二重口縁壺と壺形埴輪に分類する筆者の立場から見ると、図2-8のみが壺形埴輪となり、他の土師質の壺は二重口縁壺となる。これは、埴輪質の二重口縁壺のみが焼成前底部穿孔である点からも、儀器化への意識の現れと見られる。また、図2-1・8には胴下半部に焼成後の打ち欠き行為が施されており、前代的な様相もうかがえる。二重口縁壺の出土状況を見ると、周溝の西コーナー付近・中央部付近・東コーナー付近からまとまって出土している。単口縁壺も、他の二重口縁壺と同様な出土状況であることから、単口縁壺も含む墳丘の圍繞行為があったものと考えられる。このことから、下郷遺跡 SZ01は二重口縁壺を中心とした墳頂部圍繞が行われていたと考えられ、二重口縁壺から壺形埴輪に変わる過渡期に位置付けられる。

次に、下郷遺跡 SZ42出土遺物を見ると、二重口縁壺8 [図3-1~4]・単口縁壺1 [図3-5]・埴2 [図3-6] 点が出土している [表1]。出土遺物を概観すると、埴輪質の底部穿孔壺が主体を占める中で、図3-1の二重口縁壺のみが土師質を呈している。外面調整を見てみると、図3-1はミガキ調整を施すのに対して、他の土器は荒いハケ調整を施している。調整の相違は器種に関

係なく共通しており、土師質の土器から埴輪質の土器への過渡的様相がうかがえる。SZ01の段階ではまだ土師質の土器が主流であったが、SZ42の段階になると、埴輪質の土器が主流になっており、土器の器種ではなく、胎土から埴輪化に向かっている傾向が指摘できる。

また、同一遺構内において、土師質と埴輪質の土器が共伴する事例としては、堀之内CK-2号墳が挙げられる。CK-2号墳からは埴輪質の二重口縁壺 [図7-25~30] が出土している。この二重口縁壺と同様に埴輪質の土器は、すべて赤色塗彩が施されている。それ以外の赤色塗彩を受けていない土器は、一般集落の住居跡から出土する土器と同じ胎土であり、土師質と埴輪質の使い分けが行われている。このように、土師質と埴輪質を明確に使い分けている状況から、胎土を境界条件として設定することは妥当と考えられる。

以上のように、筆者は胎土や調整などが集落出土資料と同じものは壺形土器、胎土が埴輪化したものを壺形埴輪と定義する。

2-2 二重口縁壺の用語

本稿で取り上げる「二重口縁壺」の名称を見てみると、報告書や研究者により名称の混乱が見られる²⁾。この混乱は、「二重口縁」の用語が最初に用いられた論考(伊達・森1966:p.197)で明確な用語の定義がなされておらず、

桜井茶臼山古墳出土の二重口縁壺を便宜上「茶臼山式壺」と呼び、土器型式の中に位置付けようとした結果、二重口縁壺の定義が曖昧なまま漠然とした概念が定着していったことが誘因と見られる。これにより、二重口縁壺の対象範囲が各研究者により異なる状況が生じたと考えられる。そこで、先学の研究を踏まえた上で、筆者の立場を明らかにしたい。

「二重口縁」の名称は、口縁形態を表現する用語であり、この特徴を持つ壺の総称が二重口縁壺である。二重口縁壺の分類基準(寺澤1986、比田井1995、野々口1996、君島2000)を見ると、一次口縁、二次口縁、頸部などの組合せで分類している[図4]。そして、頸部形態が系統を表現し、接合部の形態が時間的変遷を示すことが指摘されている(利根川1993・1994、比田井1995)。このことから、最も重視する点は頸部と接合部であることが分かる。二重口縁壺の典型例である桜井茶臼山古墳出土例を見ると、口縁部と受け部の境にある接合部に「段」が存在する。この「段」の存在が、二重口縁壺の特徴と言える³⁾。この特徴を基準とすると、二重口縁壺の分類基準については接合部に「段」を持つものと定義できる。この定義から、本稿で対象とする二重口縁壺は、口縁部下端に「段」や「稜」を持ち、2段にわたって上方に外反して立ち上がる口縁を持つ壺を対象とする⁴⁾。

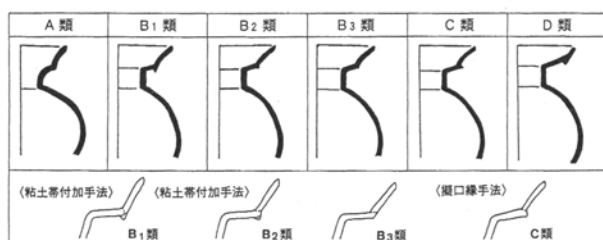


図4 口縁部の形態分類 (野々口1996)

2-3 系統について

二重口縁壺の口縁形態を見ると、多くのバリエーションが存在する⁵⁾。これらのバリエーションについては、各研究者とも系統差を反映すると認識している。

利根川章彦氏(利根川1993・1994)は、全国の二重口縁壺を対象とし、口縁部の接手法や口唇部成形手法の観点から二重口縁壺には畿内系・東海西部系・北陸系・北部九州系など多数の系統に分かれる点を指摘する。また、比田井克仁氏(比田井1995)は、集落出土の二重口縁壺も踏まえて、畿内から関東に至る各地域における二重口縁壺の時間軸・空間軸を整理し、頸部の形態から「畿内系」と「伊勢湾系」の2系統に大別する。古屋紀之氏(古屋1998)は、利根川氏の研究成果を踏まえて、東海西部系と北陸系の二重口縁壺は畿内を起源に持つ点を重視し、両者とも畿内系二重口縁壺東海型・北陸型と位置付けている。君島氏は、口縁部の形態とそれに付随する

文様に着目し、二重口縁壺を加飾の有無で2大別し、文様の種類により加飾二重口縁壺を3つに細分する(櫛描波状文系・パレス壺系・伊勢型)⁶⁾。そして、従来東海系と一括されてきた系統をパレス壺系と伊勢型二重口縁壺とに細分し(君島2002:p.56)、二重口縁壺の系統を(1)加飾垂下口縁壺、(2)パレス壺系二重口縁壺、(3)伊勢型二重口縁壺、(4)畿内系二重口縁壺の4つに大別する。

以上をまとめると、細かい地域性は見られるが、二重口縁壺の系統は「畿内系」「伊勢型」「パレス壺系」の3つに大別することができる。以下、この3大別を踏襲し、筆者の立場を明らかにしたい。

3. 事例分析

群馬県における墳墓出土の二重口縁壺は、管見に触れる限り、二重口縁壺を出土する墳墓・古墳は、38遺跡を数える[表1・2]⁷⁾。出土した遺跡を見てみると、周溝墓が57基、盛土が確認された古墳が7基を数える。周溝墓が圧倒的に多く、二重口縁壺は基本的には周溝墓に伴う土器と言える。

次に、分類ごとの基準を明確にして、具体的な事例を述べながら検討を加えていきたい。なお、時期については若狭・深澤(若狭・深澤2005)編年に従い、古墳時代前期を古・中・新の3段階で呼ぶこととする。

- (1) 畿内系二重口縁壺
- (2) 伊勢型二重口縁壺
- (3) パレス壺系二重口縁壺

(1) 畿内系二重口縁壺 [図5・6]

すでに先学で述べられているように、畿内系には2系統のものが含まれている(利根川1993、野々口1996)。短く外反した頸部に外反する二次口縁がつくタイプと頸部が直立して受け部となる一次口縁を作り出して、さらに大きく外反する二次口縁がつくタイプである。前者は畿内第V様式からの系統で、後者は「茶臼山型壺」と呼ばれる系統である。「茶臼山型」の典型例である桜井茶臼山古墳出土の二重口縁壺(君島2005)を見ると、一次口縁の接手法に相違が見られるが、頸部はすべて直立する。前者の特徴は短く外反する頸部にあり、後者の特徴は頸部の直立する点にあるので、この2つの特徴を基準として畿内系と総称する。元々2系統を内在した分類総称であるので、畿内系に含まれる二重口縁壺には多様性がある。時期差や模倣の段階差も含まれているが、今回は形態に注目して分類を行うこととする。

管見に触れる限り、群馬県における墳墓出土の畿内系二重口縁壺は、24遺跡34遺構から出土している。その中で、伊勢型と共伴する遺構が4遺跡挙げられる。畿内系に分類される二重口縁壺を見てみると、形態の特徴から以下の4つの分けられる。

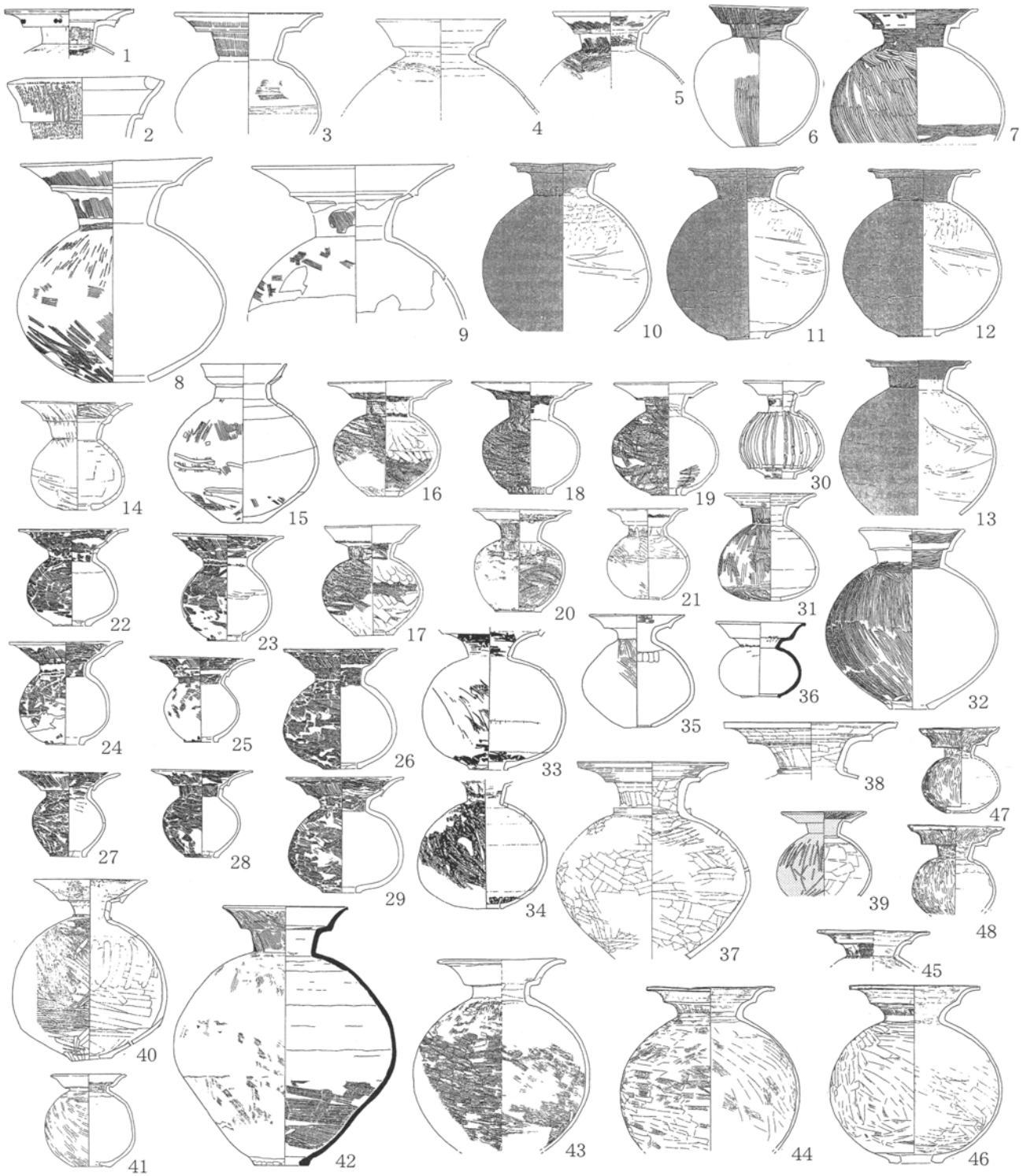


図5 畿内系二重口縁壺の類例(1) (S=1/10)

(1. 鈴の宮1号 2・3. 元島名2号 4. 下佐野A区2号 6. 倉賀野万福寺1号 7. 倉賀野万福寺4号 8. 上戸塚正上寺1号 9. 上戸塚正上寺2号 10~13. 阿・権現堂2号 14. 荒砥上久保3号 15. 二之堰7号 16~20. 堤東2号 21. 東原B1号 22~29. 東原B2号 30・31. 公田東1号 32. 荒砥宮田1号 33・34. 前橋天神山 35. 伊・東流団地19-8号 36. 今井南原 37・38. 小谷場2号 39. 磯之宮1号 40. 細田2号 41. 槍花3号 43. 舞台2号 44~46. 舞台4号 47・48. 舞台10号)

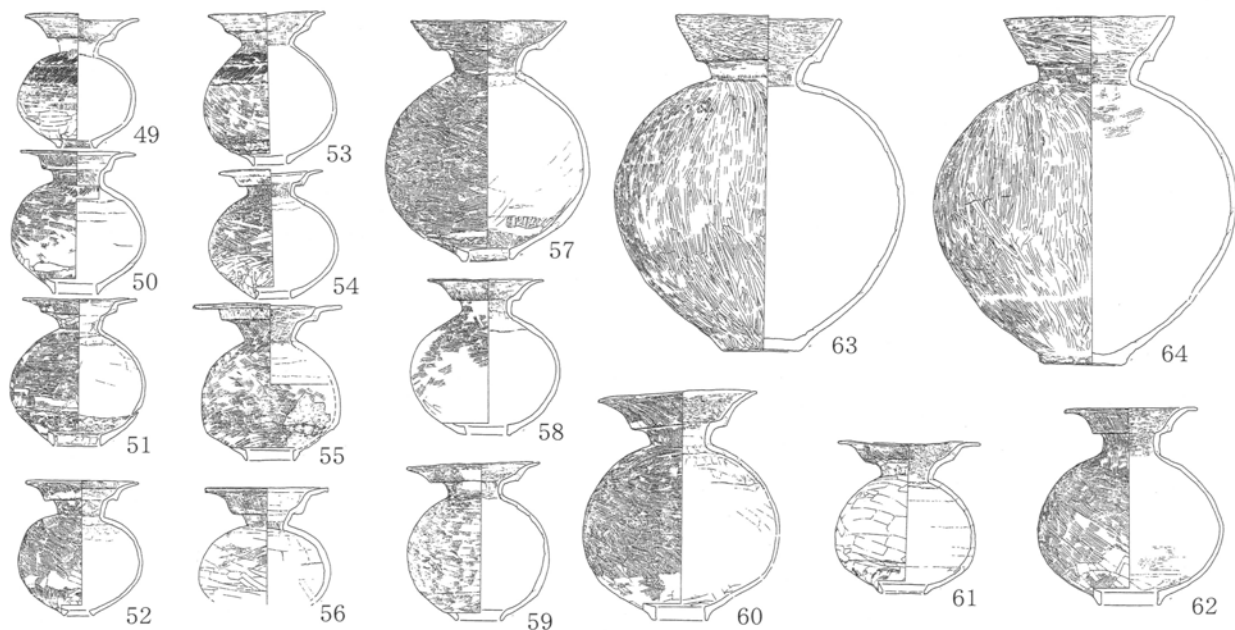


図6 畿内系二重口縁壺の類例(2) (S=1/10) 49~64. 舞台遺跡9号

- (a) 体部の最大径に対して口縁径が狭く低いもの
- (b) 口縁径が体部最大径と同じか、やや小さいもの
- (c) 二次口縁幅の狭いもの
- (d) 頸部が短く外反し、受け部に平坦面を持たないもの

(a)タイプには、下佐野Ⅰ-D区2号周溝墓[図5-5]、倉賀野万福寺1号周溝墓[図5-6]、倉賀野万福寺4号周溝墓[図5-7]、荒砥宮田1号周溝墓[図5-32]、御正作3号周溝墓[図-42]、小谷場古墳群2号周溝墓[図5-37・38]、細田2号周溝墓[図5-40]、舞台2号周溝墓[図5-43]、舞台9号周溝墓[図6-63・64]などが挙げられる。頸部は直立して受け部に狭い平坦面を形成する。体部高に対して、口縁部高が1/3から1/4の高さを測る。最も一般的な畿内系と考えられる。図5-6・42は肩部が張るタイプで焼成後底部穿孔が施されている。それ以外の底部穿孔は、焼成前に施されている。基本的には少数出土であり、本タイプの二重口縁壺の圍繞傾向は見られない。

(b)タイプには、下郷SZ01周溝墓[図2-1~7]、元島名2号周溝墓[図5-3]、荒砥上久保3号周溝墓[図5-14]、堤東2号周溝墓[図5-16~20]、東原B2号周溝墓[図5-22~29]、公田東1号周溝墓[図5-30・31]、今井南原周溝墓[図5-36]、屋敷内B遺跡周溝墓[図5-39]、舞台10号周溝墓[図5-47・48]、舞台9号周溝墓[図6-49~56・58・59・61]が挙げられる。受け部に平坦面を持つタイプ(下郷SZ01・堤東2号周溝墓など)と、受け部に平坦面を持たないタイプ(荒砥上久保3号・東原B2号周溝墓など)に分けられる。焼成後底部穿孔は図5-35のみであり、他はすべて焼成前底部穿孔である。このタイプは複数出土の遺構が多く、圍

繞傾向にあると言える。

(c)タイプには、阿曾岡・権現堂2号周溝墓出土の二重口縁壺[図5-10~13]が挙げられる。頸部の形状から畿内系に含めたが、かなりイレギュラーなタイプである。口唇部をつまみ上げる広口壺から派生したものと見られる。堀之内CK-2号墳から同じタイプの壺形埴輪が出土しており、埴輪に継続する二重口縁壺と言える。

(d)タイプには、下佐野Ⅰ-A区4号周溝墓[図5-4]、舞台4号周溝墓[図5-44~46]、檜花3号周溝墓[図5-41]が挙げられる。このタイプは、第Ⅴ様式から派生した系統の二重口縁壺で、受け部に平坦面を持たないものをさす。出土数も少なく圍繞するものはない。図5-4は、あまり墳墓に伴う二重口縁壺としては一般的ではない。

「畿内系」の特徴は、その多様性にある。元々内在する2つの系統を同じ系列で扱ったことが要因であるが、形態差も大きく複雑な様相を呈している。本稿では同じ畿内系に含めたが、再整理の必要性を感じている。特に、(c)・(d)タイプは「畿内系」とは分ける必要があるが、出土個体数が少ないので、「畿内系」の中の類型として扱った。「畿内系」の出現時期を見ると、今のところ積極的に前期古段階まで遡る要素が見当たらないので、中段階から波及・発展し、新段階まで続くとしている。

(2) 伊勢型二重口縁壺 [図7]

「伊勢型」の名称は、田口一郎氏によって命名された用語である(田口1981)。田口氏は、元島名將軍塚古墳出土の二重口縁壺を分析し、「二重に外反し、口唇部、段部外面に面を持ち、上下につまみ出す」特徴の口縁形態を持

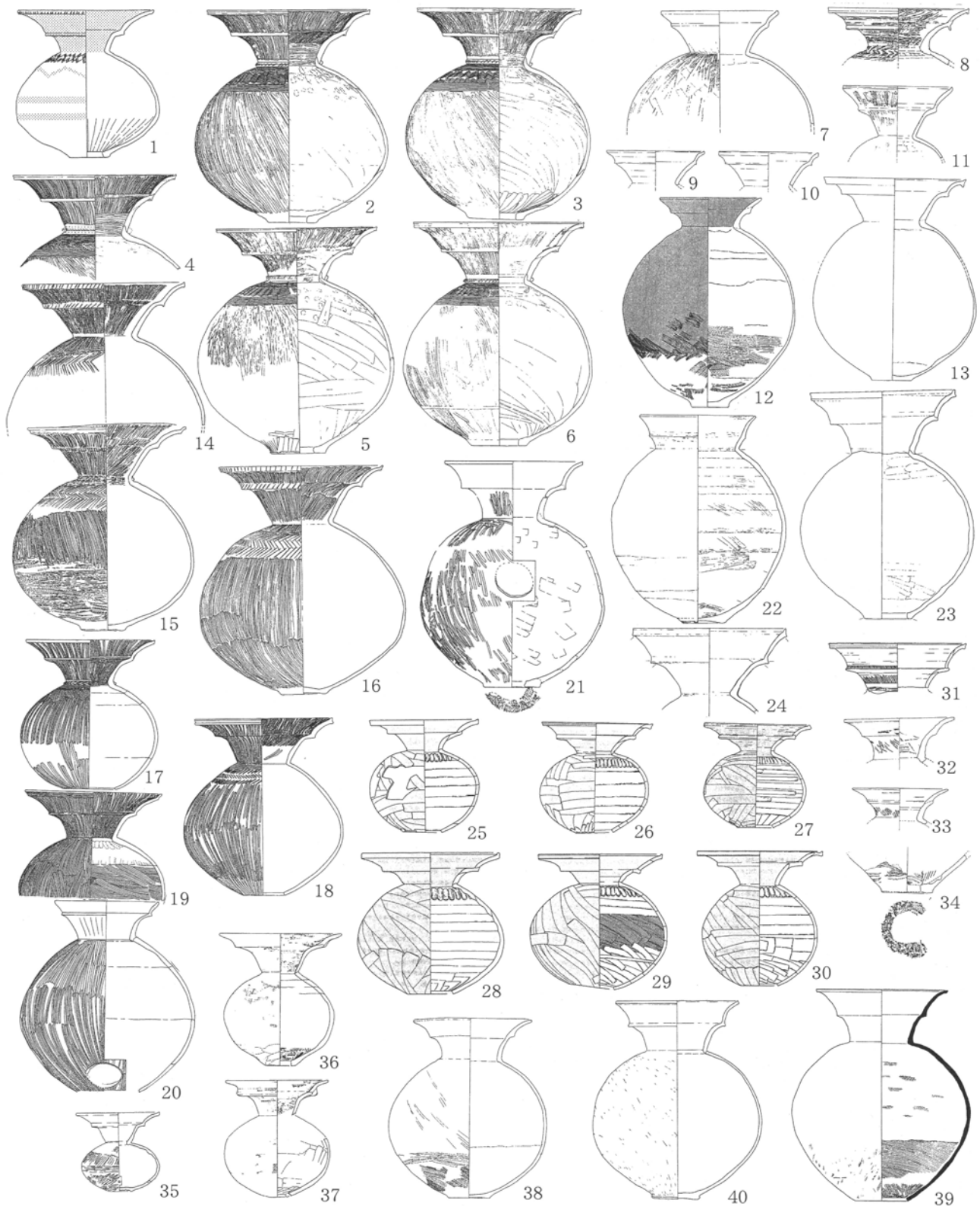


図7 伊勢型二重口縁壺の類例 (S=1/10)

(1. 元島名2号 2~6. 元島名將軍塚 7. 下佐野A区4号 8. 下佐野A区8号 9~11. 下佐野A区1号 12. 下佐野C区5号 13. 下佐野D区2号 14~16. 下佐野寺前3号 17~20. 倉賀野万福寺1号 21. 倉賀野万福寺9号 22. 下郷SZ32 24. 下郷SZ46 25~31. 堀之内CK-2号 32~34. 北山茶臼山西古墳 35. 阿曾岡・権現堂1号 36・37. 屋敷内B 38. 槍花3号 39. 御正作1号 40. 中高瀬観音山)

表1 二重口縁壺集成表(1)

古 墳 名	所在地	墳 形	二重口縁壺			壺		甕	鉢・椀 蓋・坏	高 坏	器 台
			畿内型	伊勢型	パレス	壺	小 型				
行幸田山A区1号	渋 川 市	方形周溝墓			2	1	9				
鈴ノ宮1号	高 崎 市	方形周溝墓	1					1	2		2
元島名2号墳	高 崎 市	前方後方周	2	1							
元島名将軍塚古墳	高 崎 市	前方後方墳		12			2	7		5	3
貝沢柳町1号	高 崎 市	方形周溝墓			1	3				1	
貝沢柳町2号	高 崎 市	方形周溝墓			1	1	1				1
下佐野I-A区4号	高 崎 市	方形周溝墓	1	2		5		15		1	
下佐野I-A区8号	高 崎 市	方形周溝墓		1		2	3	2	2		
下佐野I-C区1号	高 崎 市	方形周溝墓		1			1				
下佐野I-C区5号	高 崎 市	方形周溝墓		1		3	2	2			
下佐野I-D区2号	高 崎 市	方形周溝墓	1	1		1	1	2			
下佐野寺前地区3号	高 崎 市	方形周溝墓		3							
下佐野I-A区1号	高 崎 市	前方後円墳		3		8	2	10		1	
倉賀野万福寺1号	高 崎 市	方形周溝墓	1	4		5	5	2		2	3
倉賀野万福寺4号	高 崎 市	方形周溝墓	1								
倉賀野万福寺14号	高 崎 市	方形周溝墓	1					1	2		1
倉賀野万福寺9号	高 崎 市	方形周溝墓		1		1					
柴崎蟹沢古墳	高 崎 市	円墳		1				5	1		
下郷 SZ01	玉 村 町	方形周溝墓	8			3	1	1			
下郷 SZ28	玉 村 町	方形周溝墓		1		1					
下郷 SZ32	玉 村 町	方形周溝墓		1		1					
下郷 SZ42	玉 村 町	方形周溝墓	7			2	2			1	
下郷 SZ46	玉 村 町	方形周溝墓		4		4		1			
箱石浅間古墳	玉 村 町	方墳			14						
堀之内 CK-2号	藤 岡 市	前方後方周		10		10	3	1		3	1
堀之内 DK-4号	藤 岡 市	前方後方周	5			11	2				
上戸塚正上寺4区1号	藤 岡 市	周溝墓	1					1			2
上戸塚正上寺4区2号	藤 岡 市	周溝墓	1								
北山茶白山西古墳	富 岡 市	前方後方墳		11		2	1			2	
北山茶白山古墳	富 岡 市	前方後円墳		5							
阿曾岡・権現堂1号	富 岡 市	前方後円周		1		1	3	7	4		
阿曾岡・権現堂2号	富 岡 市	前方後方周	4						2		2
荒砥上久保3号	前 橋 市	方形周溝墓	3						1		
荒砥島原A区1号	前 橋 市	方形周溝墓			1	7		4			
荒砥二之堰7号	前 橋 市	方形周溝墓	1			3	1	1			
荒砥二之堰9号	前 橋 市	方形周溝墓			1	1		2			
堤東2号	前 橋 市	前方後方周	12			3	2	18	1	6	6
荒砥北原1号	前 橋 市	方形周溝墓			9	1			2	1	3
東原B1号	前 橋 市	方形周溝墓	1					6	1		3
東原B2号	前 橋 市	方形周溝墓	9				2	12	4	3	4
公田東1号	前 橋 市	前方後方周	7			3	4	1	7	2	4
西善尺司3号	前 橋 市	方形周溝墓			1	3			1		
荒砥宮田1号	前 橋 市	方形周溝墓	1				2	2		1	
朝倉2号墳	前 橋 市	円墳		2		4	3				

表2 二重口縁壺集成表(2)

古 墳 名	所在地	墳 形	二重口縁壺			壺		甕	鉢・椀 蓋・坏	高 坏	器 台
			畿内型	伊勢型	パレス	壺	小 型				
前橋天神山古墳	前 橋 市	前方後円墳	2			3	1				
伊・東流通団地19-8号	伊勢崎市	方形周溝墓	2		1	2	1				
今井南原古墳	伊勢崎市	方形周溝墓	1			2					
三ツ木遺跡1号	伊勢崎市	方形周溝墓			1	2	2	1	1	1	
波志江中野面A区14号	伊勢崎市	方形周溝墓		1		4		5	1		
舞台遺跡1号	伊勢崎市	前方後円周			9	3	5		1		
舞台遺跡2号	伊勢崎市	方形周溝墓	2			6	1	2			
舞台遺跡4号	伊勢崎市	方形周溝墓	5			1	8	5		2	1
舞台遺跡6号	伊勢崎市	方形周溝墓	1			3	3	10		6	2
舞台遺跡9号	伊勢崎市	前方後円周	19			3	3	6	1	1	4
舞台遺跡10号	伊勢崎市	方形周溝墓	2			6	4	3		2	2
小谷場古墳群2号	太 田 市	方形周溝墓	2				1				
屋敷内B遺跡	太 田 市	前方後方周		5		2	1	2		1	
磯之宮遺跡1号	太 田 市	方形周溝墓	1								
細田遺跡2号	太 田 市	方形周溝墓	2			1	1				1
槍花遺跡3号	太 田 市	方形周溝墓	1	1		1	1	1	2		
御正作遺跡1号	大 泉 町	方形周溝墓		1		9	2	6	3	5	2
御正作遺跡3号	大 泉 町	方形周溝墓	1		1	1				3	4

墳形…前方後円周＝前方後円形周溝墓、前方後方周＝前方後方形周溝墓

つ二重口縁壺を「伊勢型二重口縁壺」（田口1981：p.86）」と定義した⁹⁾。伊勢型の系譜は、田口氏は伊勢地方の弥生後期末の単口縁広口壺に求めている（田口1981：p.87）。比田井氏は、畿内の二重口縁が伊勢で分化・発生したものとしている（比田井1995：p.98）。新名強氏は、河内地方の二重口縁壺と伊勢湾岸の櫛描文様が結びついて伊勢型二重口縁壺が誕生したと見ている（新名2000：p.125）。その系統については、伊勢地方に求める見解が最も強いと見られる¹⁰⁾。

伊勢型二重口縁壺の定義は、田口氏の見解を踏襲する。田口氏の定義は伊勢型二重口縁壺の典型例を述べているので、本稿では頸部の形状を優先し、頸部が頸部が逆「ハ」字状に開くものをさすこととする。

伊勢型二重口縁壺の編年について田口氏は、肩部・口縁端部文様の無文化、胴部ヘラミガキの粗雑化、口縁端部及び段部端部の面取りの退化、口縁下部の長大化、長胴化などを指標に挙げてIV期に区分する。Ⅰ・Ⅱ期が前期古段階、Ⅲ期が前期中段階、Ⅳ期が前期新段階に対応すると考えられる。田口氏に賛同する立場であるが、受け部の省略化と口縁径と体部最大径の同一化傾向を加味して考え合わせると、Ⅳ期の部分で若干の相違点が出てくる。Ⅲ期までは一系統と見られるが、Ⅳ期になるとa～cの3つの系統に分かれると考えられる。

a系統は、田口氏が提唱する伊勢型二重口縁壺の典型例の系統で、下郷SZ32・46〔図7-23・24〕が挙げられ

る。この系統は田口氏のⅣ期に相当し、前期新段階に位置付けられる。下佐野寺前6号墳からは同じ系統の壺形埴輪が出土しており、埴輪に継続する系統である。

b系統は、口縁系と体部最大径がほぼ同じ大きさになるタイプで、阿曾岡・権現堂1号周溝墓〔図7-35〕、屋敷内B周溝墓〔図7-36・37〕が挙げられる。図7-35は、五領遺跡から同じ形態の二重口縁壺が出土している。前期中段階に位置付けられ、Ⅲ期に遡る可能性もある。図7-36・37は受け部の省略化が進んでおり、図7-35より後続する。前期新段階に位置付けられる。堀之内CK-2号周溝墓〔図7-25～30〕出土の壺形埴輪は、頸部が短い口縁径と胴部最大径がほぼ同じ点を重視すると、この系統が埴輪化したものと見られる。

c系統は、一次口縁が擬口縁を呈することなく、稜で表現されている形態である。このタイプを仮に貼付類型と呼称すると、下郷SZ28出土の二重口縁壺〔図7-22〕がその指標として挙げられる。貼付類型は、下佐野C-5号周溝墓〔図7-12〕、槍花3号周溝墓〔図7-38〕、御正作1号周溝墓〔図7-39〕が挙げられる。貼付類型は、頸部の長短でさらに2つに細分が可能である。北山茶臼山西古墳〔図7-32～34〕出土壺形埴輪は、長頸タイプ〔図7-38・39〕が埴輪化したものと見られる。短頸タイプ〔図7-12・22〕は、長胴化が進んでおり、単数出土である。このタイプは埴輪化志向が見られない。

「伊勢型」は、14遺跡23遺構から出土している。特に、

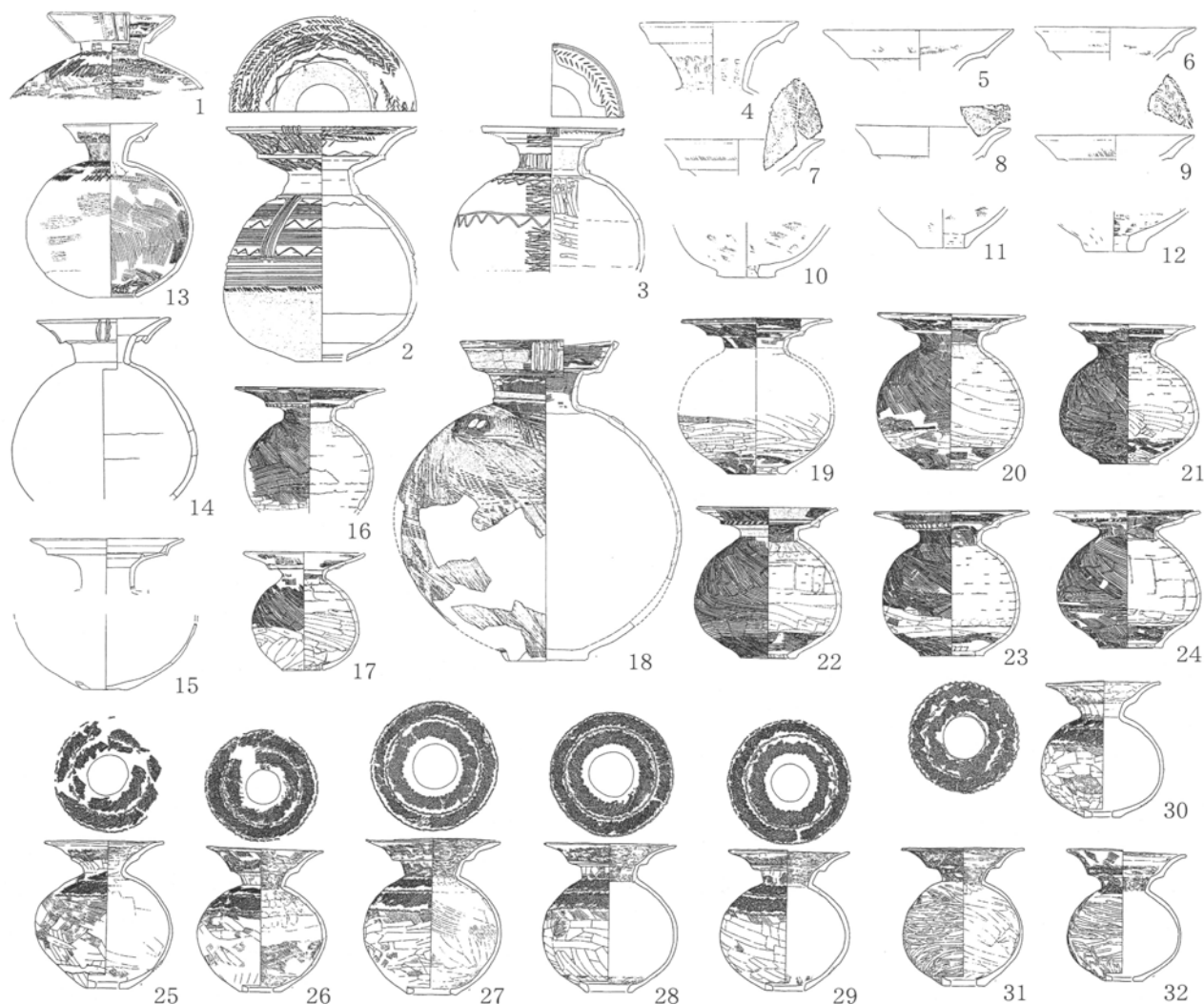


図8 パレス壺系二重口縁壺の類例 (S=1/10)

(1. 行幸田山1号 2. 貝沢柳町1号 3. 貝沢柳町2号 4~12. 箱石浅間 13. 荒砥島原1号 14. 二之堰9号
15. 西善尺司3号 16~24. 荒砥北原1号 25~32. 舞台1号)

井野川流域の墳墓から多く出土している。出現時期を見てみると、Ⅰ・Ⅱ期の前期古段階でのプロトタイプの様相に明瞭さを欠くが、Ⅲ期の前期中段階で典型的な形態が確立し、Ⅲ期以降は安定した存在感を見せる。その後、継続して壺形埴輪に展開する系統と言える。「伊勢型」と類似する二重口縁壺が伊勢湾地域から多数出土しており、本地域との関係が指摘されている。故地をどこに求めるかについてはさらに詳細な検討が必要であるが、出土墳墓数や出土数から見て、群馬地域と最も関連のある地域は伊勢湾地域と言える¹¹⁾。

(3) パレス壺系二重口縁壺 [図8]

パレススタイル壺の中で、口縁部が二重口縁壺を持つものをさす。浅井氏の分類(浅井1987)では「Form III」、田口氏の分類(田口1987)ではB形式およびC形式に対

応する。この系統のポイントは加飾にあり、頸部の形態などに固定的な特徴を見いだせない。岩崎氏は、弘法山古墳出土のパレススタイル壺について、東海的要素と畿内の要素の「接触変容の結果」(岩崎1985:p.29)生み出されたものと理解しており、まさに畿内の様相と東海的様相の混合系と言える。君嶋氏は荒砥北原1号墳の事例を挙げ、胴部は無紋化しているが口縁内面に見られるの突線などの施文原理を継承している点を重視し、東海系パレス壺の系統と見ている(君嶋2002)。加飾のない二重口縁壺にも、パレス壺系の要素を見いだした点は卓見と言える。無文を呈していても、パレス壺の伝統的スタイルを保持するものはパレス壺系に含まれると考えられる。では、畿内系や伊勢型に分類された二重口縁壺に加飾を持つものはどう理解すべきであろうか。坂本氏は、元島名将軍塚古墳(伊勢型二重口縁壺)の中にも装飾壺

があると述べている(坂本1992:p.23)。確かに、伊勢型二重口縁壺の胴肩部に平行線・波状紋・刺突による羽状文、頸部から縦に垂下させる浅い櫛描紋等の文様を施文したり、頸部と胴部の境目に刻み目をいれる突帯を持っており、装飾壺的要素を持つとも言える。しかし、二次口縁のつまみあげや体部のプロポーションなどから、パレス系壺二重口縁壺の系統には含まれない。加飾と口縁部形態とは、元来異なる判断基準であり、同じ土俵で語るべきものではない。これを同じ判断基準で語るところに概念の混乱が生じた要因があると考えられる。パレス壺系は、元々存在した加飾壺の要素に「二重口縁」が融合して誕生した土器であり、その特徴は口縁部ではなく加飾文様にあり、「畿内系」「伊勢型」とは別の基準で分類された土器と言える。本稿では、口縁部形態が「二重口縁」を呈するものだけを対象とする。

パレス壺系を概観すると、3つに大別ができる。

- (1) パレススタイルの加飾文様を保持するもの
- (2) 二次口縁に文様帯を持つもの
- (3) プロポーションは別系統であるが、パレス壺の残像を残すもの

(1)の事例としては、貝沢柳町1・2号周溝墓から出土した二重口縁壺[図8-2・3]が挙げられる。貝沢柳町1号周溝墓からは、二重口縁壺と一緒に棒状浮文を貼付した加飾広口壺が出土しており、胴部は同様な文様構成である。このパレス系二重口縁壺は、やや内傾するくの字状を呈している。一次口縁と二次口縁の接合部は、接合に用いた粘土が余って下に突出させるタイプ(利根川分類a-1型、野々口分類B2類に相当)で、二重口縁壺の成形手法を用いている。貝沢柳町2号周溝墓出土の二重口縁壺[図8-3]も、口縁部の加飾や胴部文様構成などもパレス壺の典型と言える。貝沢柳町1・2号周溝墓出土のパレス系二重口縁壺は、弘法山古墳と同時期であり、前期古段階に位置付けられる。パレス壺の無文様化と口縁部内面の突帯文の省略化したものが、西善尺司3号周溝墓[図8-15]、荒砥北原1号周溝墓[図8-16~24]に見られる。西善尺司3号周溝墓出土の二重口縁壺は、口縁部内面の突線が明瞭に残る。口縁に伴う底部は焼成前底部穿孔が施され、その後孔を粘土で塞いだ痕跡が残る。荒砥北原1号周溝墓からは8点のパレス系二重口縁壺が出土しているが、そのうち1点[図8-17]の口縁部内面の突線は不明瞭であり、形骸化が進んでいると見られる。頸部の形状を見ると、前者が長く直立するのに対して、後者は短く直立して口縁径と体部最大径がほぼ同じである。このことから、前者の方が古い様相を呈していると見られるが、両者とも前期中段階に位置付けられる。

(2)の事例としては、行幸田山1号周溝墓[図8-1]・荒砥島原1号周溝墓[図8-13]、二之堰7号周溝墓[図

8-14]、荒砥北原1号周溝墓[図8-18]が挙げられる。前者は口縁部文様帯に棒状浮文がつくタイプであり、典型的なパレス壺の系譜と言える。口縁部の形状は、明瞭な二重口縁を呈していないが、ここではパレス壺系とした。後者[図8-13]は体部最大径と比べて口縁径が極端に狭い点が特徴と言える。口縁部文様帯に波状文やボタン状貼付文を施文する手法は、東海西部系のパレススタイル壺の影響と見られる。頸部の形態を見ると、頸部が直立していることから、庄内系の影響を受けた畿内系とも見えるが、口縁部文様帯の幅が狭い点、頸部が細くて長い点からパレス壺系に分類した。類似した事例として、鈴ノ宮1号周溝墓[図7-1]が挙げられる。鈴ノ宮1号墳の二重口縁壺は、直立する頸部を持ち、口縁部文様帯にボタン状貼付文を持ち頸部が直立する二重口縁壺である。口縁部文様帯を比べると、パレス壺系とも見えるが、口縁部文様帯が広くしっかりしている点、頸部の調整も丁寧な点などから、鈴ノ宮1号周溝墓の事例は庄内系の影響を受けた畿内系二重口縁壺に分類した。荒砥島原1号周溝墓は前期古段階に位置付けられ、その後継続して前期新段階まで出土している。

(3)の事例としては、舞台1号周溝墓[図8-25~30]が挙げられる。舞台1号周溝墓出土の二重口縁壺には、口縁内面に縄文施文が施されている。器種組成は、成度の高い焼成前底部穿孔の二重口縁壺を中心に大小壺・高坏・埴などが出土している。二重口縁壺は、肩部に縄文を施文するもの[図8-25~30]6点と無文のもの[図8-31・32]2点の2種類がある。加飾された二重口縁壺は、肩部に横位二段の縄文帯が施文させる。無文の二重口縁壺は、体部にヘラミガキが施される。プロポーションを見ると、口縁内面と肩部の縄文施文を除けば、他の舞台遺跡出土二重口縁壺や東原B2号周溝墓出土の二重口縁壺との類似性が高く、畿内系に分けられる。舞台遺跡内の連続性を考慮すると、1号周溝墓以外の二重口縁壺は大小の差はあるがすべて畿内系であり、1号周溝墓にも同様な器形の共通性が認められるので畿内系の要素がうかがえる。今回は文様施文を重視してパレス壺系に分類したが、再考の余地のある一群と言える。

パレス系二重口縁壺は、12遺跡から出土している。出土数を見てみると、荒砥北原1号周溝墓・舞台1号周溝墓以外からは1遺構1点のみの出土であり、圍繞傾向は認められない。また、胎土が「埴輪化」志向を持つパレス系二重口縁壺も出土していないことから、壺形埴輪には展開しないと考えられる。

4. まとめと展望

本稿では、二重口縁壺の概念規定とそれに係わる問題を整理し、群馬県内における墳墓出土の二重口縁壺を集成して、系統を把握する目的で分類を試みた。この系統

を把握することで、二重口縁壺から壺形埴輪への系統変遷を理解できると考えたからである。群馬県内の二重口縁壺は、「畿内系」「伊勢型」「パレス壺系型」の3系統に大別が可能である。それぞれの系統には、2～3の類型が存在し、それぞれが「折衷」「模倣」「変容」を繰り返して発展・衰退しており、複雑な様相を呈している。

古墳成立期は、魏志倭人伝に記述があるように、前代からの伝統文化の崩壊や活発な地域間交流の影響を受けた大混乱期に当たり、まさにこの混乱した世情を反映した土器が二重口縁壺と言える。二重口縁壺の出土様相を見ると、「パレス壺系」が古墳時代前期古段階から出土しており、最初に登場する。荒砥島原1号周溝墓や貝沢柳町1・2号周溝墓などに見られるように、少数出土が中心であり、他の供献土器と同様な存在である。前期中段階には、「畿内系」「伊勢型」が登場して「折衷」「模倣」「変容」を繰り返しており、試行錯誤の段階と言える。前期新段階には「畿内系」「伊勢型」二重口縁壺に埴輪化の胎動が見られ、「パレス壺系」は淘汰されていく。淘汰の要因は、パレス壺系は大量生産に不向きな要素もあるが、「畿内系」「伊勢型」二重口縁壺とは立脚点異なる点が考えられる。「畿内系」「伊勢型」の特徴は二段階に開く口縁部形態にあるが、「パレス壺系」の特徴は加飾文様にある。パレス壺系二重口縁壺は、口縁部の形態から二重口縁壺に含めたが、本来はパレス壺の一形態であり、その立脚点は「畿内系」「伊勢型」とは異なっている。このことから、「パレス壺系」のみ壺形埴輪に継続しなかったと考えられる。

二重口縁壺から壺形埴輪への展開は、囲繞や底部穿孔ではなく、胎土から変化していくことを指摘した。胎土の選択は、製作者の成形段階での意志が反映する。他の土器と異なる意識・目的で製作する場面において、胎土を換える必然性が生じたと考えられる。その意志は、下郷SZ01や堀之内CK-2に見られるように器形に反映させることなく、胎土の変換に帰結したと理解した。日常・慣習的に製作していた土器に、他の要素を加えることで質的变化をもたらしたものと考えられる。これが、二重口縁壺の儀器化の出発点と位置付けられる。二重口縁壺の胎土が土師質から埴輪質へ変化する過程は、土器祭祀から埴輪祭祀に転換する画期であり、ここに古墳成立期の祭祀の変換点を見出せる。では、埴輪化の胎動は、どこに起源があるのだろうか。本稿では、分析対象を群馬県に限定したので、隣接地域との関連性について触れることができなかった。今後は全国的な視野に立って二重口縁壺の系統分類を行い、地域的な連動性を踏まえながら土器祭祀から埴輪祭祀に転換する背景について考えていきたい。また、各系統ごとの時系列や関連性についてはあまり触れることが出来なかった。その結果、分類自体が大変大雑把なものとなってしまった。特に「畿内

系」は混乱した様相を呈してしまい、時期軸や空間軸、成形技法を含めて再整理の必要性を感じている。多くの課題・問題を山積みにしたままの分類結果となってしまった。読者の御叱咤・御批判を仰ぎ、今後の研究の糧としたい。

謝辞

本稿を草するに、長井正欣氏、諸田康成氏には資料集成などに多大な協力を頂きました。文末ながら、記して深甚なる感謝の意を表したい。また、日頃より怠惰な筆者に叱咤激励して下さる多くの人たちに合わせて感謝の意を表したい。(順不同・敬称略)。

巾 隆之・志村 哲・加部二生・島田孝雄・長井正欣・諸田康成・横澤真一・田中 裕・上野恭子・入澤雪絵

註

- 1) 竹中克繁(竹中2004:p.13)は、「壺形埴輪」の定義付けには「型式型」的立場と、「機能論」的立場による見解があると述べている。
- 2) 二重口縁壺以外に「複合口縁壺」や「有段口縁壺」、「パレススタイル壺」と呼ばれている。この混乱については、君島氏がすでに指摘している(君島2000:p.5)。
- 3) ここで問題となるのが「段」の認識である。君島氏は「段」だけでなく「稜」も含んでいる。筆者も同意見である。この「段」と「稜」の違いは、時間差と模倣の段階差の2つがあると考えられる。
- 4) 野々口氏(野々口1996)のD類、君島氏(君島2002)の加飾垂下口縁壺、古屋氏(古屋1998)の有段口縁壺は、筆者の二重口縁壺の概念には含まない。
- 5) このバリエーションについて、野々口氏は頸部の成形技法に着目してA～D類の4つに大別し、B類のみを3つに細分する。比田井氏は、口縁有段部と頸部から形態から4つに大別、12に細別する。新名氏・君島氏は基本的に3つに大別する。
- 6) 君島氏は、二重口縁壺を4つに分類する。櫛描波状文系二重口縁壺・パレス壺系二重口縁壺・伊勢型二重口縁壺・無飾二重口縁壺の4つに分類する(君島2000:p.7～11)。無飾二重口縁壺は、加飾二重口縁壺が無飾化したものと理解している。
- 7) この表は、報告書に実測図が掲載されている個体数を数えたものであり、実際に出土した個体数を反映していないものもある。例えば、箱石浅間古墳、北山茶臼山古墳、朝倉2号墳、前橋天神山古墳、磯之宮遺跡第1号墳が挙げられる。これらの古墳は、正式な報告書は刊行されていないが、資料集や県史、他の報告書などで一部実測図が公開されているものを数えた。前橋天神山は、二重口縁壺が囲繞されていた古墳であるが、二重口縁壺の実測図が2点しか公開されていないので2点と数えた。また、基本的には土師質の二重口縁壺出土遺跡を対象としたが、一部壺形埴輪出土遺跡も含まれている。
- 8) 桜井茶臼山古墳出土の二重口縁壺については、君島氏が詳細な検討を行っている。今まであまり知られていなかった桜井茶臼山古墳出土の二重口縁壺のパラエティーの存在を明らかにし、一次口縁部の接合手法からA～E類の5つに大別する。そして、一次口縁部の接合手法と口唇部成形手法などの細部の多様性を「様式」ととられ、畿内前期古墳出土の二重口縁壺に4つの様式を設定した。
- 9) その後、田口氏は、「〇二重に外反する口縁部、〇口縁下段は擬口縁で、〇口縁端部と段部側面は平坦な面を持ち上下につまみ出す、〇胴部形態は、胴が張る算盤玉状で下部に最大径をもち平底、〇口縁端部と段部側面に刺突紋・ヘラ描き、胴肩部に平行線・波状紋・刺突による羽状紋頸部から縦に垂下させる浅い櫛描紋等の紋様を持つもの」(田口2000:p.99～100)の5つの条件で定義した。
- 10) 伊勢型二重口縁壺の故地については、青木勘時氏から伊勢型壺の故地を畿内とする見解が出されている(青木2001)。青木氏は、東殿塚古

墳出土遺物の整理から、同古墳出土土器を伊勢型二重口縁壺の祖型に位置付けている。筆者は伊勢型二重口縁壺の故地を伊勢地域と考えているが、上毛地域との関係を踏まえて検討する余地があるので、ここではこれ以上触れないこととする。

- 11) 群馬県出土の伊勢型二重口縁壺は、当初から伊勢地方の二重口縁壺との対応関係が指摘されている。両地域の二重口縁壺を比べると、坂本山6号墳や前田町屋2号墳と倉賀野万福寺1号周溝墓や元島名將軍塚古墳と極めて高い親近性が強いことがうかがえる。その一方で、伊勢地域との古墳の対応関係を見ると、各研究者により相違がうかがえる。田口氏は群馬県出土の伊勢型二重口縁壺をⅣ期に区分する中で、元島名將軍塚古墳をⅢ期に位置付け、伊勢地方においては中瀬古墳が対応すると考えている。新名氏は、伊勢地方における伊勢型二重口縁壺を編年をⅣ期に編年し、前田町屋2号墳・中瀬古墳・大足1号墳をⅡ期に位置付け、それに対応する上野地域の古墳として倉賀野万福寺1号周溝墓と下佐野寺前3号周溝墓を挙げている。Ⅲ期には、前田町屋1・3号墳・坂本山6号墳・大足2号墳を位置付け、元島名將軍塚古墳がそれに対応すると述べている。Ⅳ期の深長古墳・西野3号墳には、元島名2号周溝墓が対応するとしている。新名氏は、倉賀野万福寺1号・下佐野寺前3号周溝墓→元島名將軍塚古墳→元島名2号周溝墓の変遷を考えている。利根川氏は、擬口縁部端部の作り方や口縁部のプローションなどが元島名將軍塚古墳→倉賀野万福寺1号周溝墓の流れを考えている。いずれも、前期中段階での見解の相違であり、検討の余地がある。

参考文献

- 赤塚次郎 1995 「壺を加飾する」『考古学フォーラム』7 考古学フォーラム p.13-26
- 赤塚次郎 1990 『廻間遺跡』(財)愛知県埋蔵文化財センター
- 赤塚次郎 2001 「壺形埴輪の復権」『史跡青塚古墳調査報告書』犬山市埋蔵文化財調査報告書第1集 犬山市教育委員会 p.44-52
- 赤塚次郎・石黒立人・藤根 久 1997 『西上免遺跡』(財)愛知県埋蔵文化財センター
- 浅井和宏 1987 「『パレス・スタイル壺』小考」『マージナル』7 愛知考古学談話会 p.66-85
- 荒巻 実ほか 1982 『A1 堀之内遺跡群』群馬県藤岡市教育委員会
- 飯塚恵子・五十嵐至・田口一郎 1978 『鈴ノ宮遺跡』高崎市教育委員会
- 飯塚卓二ほか 1989 『下佐野遺跡 I 地区・寺前地区』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 五十嵐 至・五十嵐 信・白石 修 1979 『元島名遺跡』高崎市教育委員会
- 石坂 茂 1983 『荒砥島原遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 石坂 茂 1986 『荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 石塚久則 1996 『鶴巻山古墳』『太田市史 通史篇原始古代』太田市 p.796-798
- 石塚久則・中里吉伸 1996 『細田遺跡』『太田市史 通史篇原始古代』太田市 p.762-766
- 伊藤裕偉 1991 「古墳時代前期における土器製作技法の検討―伊勢地方における事例を通して―」『天花寺山』一志町埋蔵文化財調査報告12・嬉野町埋蔵文化財調査報告7 一志町・嬉野町遺跡調査会 p.224-237
- 伊藤裕偉 1998 「嶋拔 第1次調査」『三重県埋蔵文化財調査報告』174 三重県埋蔵文化財センター
- 伊藤裕偉・川崎志乃 2001 「嶋拔Ⅲ」『三重県埋蔵文化財調査報告』218 三重県埋蔵文化財センター
- 井上 太 1993 「中高瀬観音山遺跡」『富岡市埋蔵文化財発掘調査報告書』第17集 富岡市教育委員会
- 岩崎卓也 1985 「土師器による編年」『季刊考古学』10 雄山閣 p.27-30
- 上田宏範・中村春寿 1961 「桜井茶臼山古墳 附櫛山古墳」奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第19冊 奈良県教育委員会
- 内田憲治 1985 『峯岸遺跡』新里村教育委員会
- 梅沢重昭・平野進一 1971 「太田市米沢二ツ山古墳―および墳丘下発見の住居址―」群馬県教育委員会
- 大木紳一郎 1984 『三ツ木遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 折原洋一 1988 「上諏訪山A・B・中山A・東原A・B遺跡」荒砥北部遺跡群調査会・群馬県教育委員会
- 折原洋一 1992 「上諏訪山A・B・中山A・東原A・B遺跡」群馬県教育委員会・荒砥北部遺跡群調査会
- 蒲原宏行 1989 「北部九州出土の畿内系二重口縁壺―その編年と系譜をめぐって―」『古文化談叢』20 (中) p.43-75
- 川崎志乃 2002 「伊勢型二重口縁壺の基礎的研究」『Mie history』No.13 三重県歴史文化研究会 p.1-12
- 木野和紀 2004 「市原市辺田古墳群・御林跡遺跡」『上総国分寺台遺跡調査報告』Ⅻ (財)市原市文化財センター
- 君嶋俊行 2000 「関東地方における壺形埴輪の成立に関する覚書」『奥津城研究』創刊号 奥津城研究会 p.2-17
- 君嶋俊行 2002 a 「関東地方における壺形埴輪の成立過程」『土曜考古』26 土曜考古学研究会 p.35-64
- 君嶋俊行 2002 b 「二重口縁壺の研究動向」『奥津城研究』第2号 奥津城研究会 p.64-68
- 君嶋俊行 2005 「4. 桜井茶臼山古墳出土の二重口縁壺」『桜井茶臼山古墳の研究』大阪市立大学考古学研究報告第2冊 大阪市立大学日本史研究室 p.77-94
- 久保泰博 1986 「Ⅷ―1 貝沢柳町遺跡出土のパレススタイル系の壺」『群馬県高崎市文化財調査報告書』第74集 p.18-19
- 久保泰博・篠原幹夫 「貝沢柳町遺跡」『群馬県高崎市文化財調査報告書』第74集 高崎市教育委員会
- 車崎正彦 1984 『御正作遺跡』大泉町教育委員会
- 腰塚徳司・東 宏和 1997 『東八木遺跡、阿曾岡・権現堂遺跡』第24集 富岡市教育委員会
- 小島敦子・徳江秀夫・赤沼英男 2003 「荒砥宮田遺跡Ⅰ 縄文・古墳時代の調査」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 小玉道明 1970 「坂本山古墳群・坂本山中世墓群」『津市埋蔵文化財調査報告』2 津市教育委員会
- 小林三郎 1972 「古墳出土の土師式土器」『土師式土器集成本編2 (中期)』杉原荘介・大塚初重編 東京堂出版
- 小林 秀 1990 「大足遺跡」『伊勢寺廃寺・下川遺跡ほか』三重県文化財センター
- 小宮 豪・静野勝信・福嶋正史 2000 「檜花遺跡」『新田東部遺跡群Ⅱ』新田町教育委員会・群馬県企業局
- 坂口 一・赤山容造 1982 『伊勢崎・東流通団地遺跡』群馬県企業局
- 塩谷 修 1990 「関東地方における古墳出現の背景」『土浦市立博物館紀要』3 p.1-15
- 塩谷 修 1992 「壺形埴輪の性格」『博古研究』2 博古研究会 p.1-18
- 島田孝雄 1994 「小谷場古墳群(第Ⅲ次)」『埋蔵文化財発掘調査年報4 一平成4年度』太田市教育委員会
- 島田孝雄 1995 「富沢古墳群(第Ⅷ次)」『埋蔵文化財発掘調査年報5 一平成5年度』太田市教育委員会
- 島田孝雄 1996 a 「富沢古墳群(富田遺跡)」『太田市史 通史篇原始古代』太田市 p.643-654
- 島田孝雄 1996 b 「磯之宮遺跡」『太田市史 通史篇原始古代』太田市 p.718-726
- 下城 正 1992 『上戸塚正上寺遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 下城 正・迫川佳子・大西雅広 1997 『磐島川端遺跡・公田東遺跡・公田池尻遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 白石 修・高橋 淳・湯浅昭平 1985 『矢中村東B遺跡』第60集 高崎市教育委員会
- 新名 強 1999 a 「三重県出土の二重口縁壺について」『研究紀要8』三重県埋蔵文化財センター p.49-54
- 新名 強 1999 b 「3. 結語」『前田町屋遺跡 第2次調査』三重県埋蔵文化財センター p.38-42
- 新名 強 2000 「二重口縁壺からみた伊勢湾岸」『S字甕を考える』東海考古学フォーラム p.120-128
- 萱室康光 1977 「中瀬遺跡発掘調査報告」『津市埋蔵文化財調査報告』

14 津市教育委員会

- 須田貞崇 2001 『西善尺司遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
関口 修・鷺谷享信 1994 『倉賀野万福寺Ⅱ遺跡発掘調査報告書』高崎市遺跡調査会・高崎市教育委員会・日本国有鉄道清算事業団
田島桂男 1974 「八幡原遺跡」『高崎市文化財調査報告書』第3集 高崎市教育委員会
寺沢 薫 1986 「大和における古式土師器の細別試案」『矢部遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第49冊 奈良県橿原考古学研究所 p.339-371
田口一郎編 1981 『元島名將軍塚古墳』第22集 高崎市教育委員会
田口一郎 1989 「群馬県」『古墳時代前半期の古墳出土土器の検討—第1分冊』第25回埋蔵文化財研究集会 埋蔵文化財研究会 p.257-356
田口一郎 2000 「北関東西部におけるS字口縁壺の波及と定着」『S字壺を考える』東海考古学フォーラム p.94-103
田口正美 1988 「大島上城遺跡 北山茶臼山西古墳」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
竹中克繁 2004 「九州壺形埴輪研究序論—壺形埴輪の変遷とその意義—」『熊本古墳研究』第2号 熊本古墳研究会 p.13-32
伊達宗泰・森 浩一 1966 「3 土器」『日本の考古学』河出書房 p.188-210
田中清美 1988 「弥生時代前・中期における穿孔・打ち欠きのみられる土器について」『考古学論集』Ⅱ 考古学を学ぶ会 p.33-50
田中新史 2002 「有段口縁壺の成立と展開—特化への道程・類別と2地域の分析—」『土筆』第6号 土筆舎 p.365-428
角田芳昭 2001 『波志江中野面遺跡 (1) —古墳時代以降編—』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
徳江秀夫 1985 「荒砥二之堰遺跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
利根川章彦 1993・1994 「二重口縁壺小考 (上・下)」『調査研究報告』6・7 埼玉県立さきたま資料館 p.13-25、15-24
日栄智子 1997 「前田町屋遺跡 (第1次) 発掘調査報告」三重県埋蔵文化財センター
能登 健ほか 1982 「荒砥上川久保遺跡」群馬県教育委員会
野々口陽子 1996 「いわゆる畿内系二重口縁壺の展開」『京都府埋蔵文化財論集』第3集 京都府埋蔵文化財調査研究センター p.225-242
橋本博文・加部二生 1996 「鍾馗塚古墳」『太田市史 通史篇原始古代』太田市 p.664-665
巾 隆之 1980 『下郷』群馬県教育委員会
比田井克仁 1995 「二重口縁壺の東国波及」『古代』(100): 88-117
平岡和夫編 1983 『倉賀野万福寺遺跡』倉賀野万福寺遺跡調査会
平野進一 1984 「箱石浅間古墳」『古墳出現期の地域性』第5回三県シンポジウム 千曲川水系古代文化研究会ほか
廣瀬 寛 2001 「茶臼山型二重口縁壺と前期古墳の朝顔形埴輪—頸部製作技法からみた系譜関係について—」『立命館大学考古学論集』Ⅱ 立命館大学考古学論集刊行会 p.113-136
深澤敦仁 1998 「上野における土器の交流と画期」『庄内式土器研究』Ⅺ 庄内式土器研究会
深澤敦仁・小林 修 2006 「渋川市赤城町所在・滝沢天神遺跡2号住居出土古式土師器の位置づけ—群馬県渋川地域の古式土師器の編年作業を通して—」『研究紀要』24 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 p.33-52
古屋紀之 1998 「墳墓における土器配置の系譜と意義—東日本の古墳

時代の開始—」『駿台史学』(104): 31-81

- 古屋紀之 2002 a 「墳墓における土器配置から古墳時代の開始に迫る」『弥生の「ムラ」から古墳の「クニ」へ』大学合同考古学シンポジウム実行委員会編 学生社 p.182-193
古屋紀之 2002 b 「古墳出現前後の葬送儀礼—土器・埴輪配置から把握される葬送祭祀の系譜整理—」『日本考古学』(14): 1-20
古屋紀之 2004 a 「北陸における古墳出現前後の墳墓と変遷—東西墳墓の土器配置系譜整理の一環として—」『駿台史学』(120): 107-136
古屋紀之 2004 b 「底部穿孔壺による圍繞配列の展開と特質—関東・東北の古墳時代前期の墳墓を中心に—」『土曜考古』28 土曜考古学研究会 p.81-99
増田安生 1988 「三重県松阪市深長古墳出土の二重口縁壺」『マージナル』No.9 p.50-71
松島栄治 1981 「前橋天神山古墳」『群馬県史 資料編3』原始古代3・古墳 群馬県史編さん委員会 p.48-58
松田 猛 1985 「堤東遺跡」群馬県教育委員会
松村一昭 1980 『今井南原遺跡発掘調査概報』赤堀村教育委員会
宮田 毅 1996 「屋敷内B遺跡」『太田市史 通史篇原始古代』太田市 p.576-579
横倉興一・小野和之 1979 『小八木遺跡調査報告書 (I)』第8集 高崎市教育委員会
若狭 徹・深澤敦仁 2005 「北関東西部における古墳出現期の社会」『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』新潟県考古学会 p.221-234
綿貫邦男 2004 「舞台遺跡 (2) —(古墳時代編)—」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

挿図の出典

- 図1: (君嶋2000) を一部改変
図2: (巾1980)
図3: (巾1980)
図4: (野々口1996)
図5: 1. (飯塚ほか1978) 2・3. (五十嵐ほか1979) 4・5. (飯塚ほか1989) 6・7. (平岡ほか1983) 8・9. (下城1992) 10~13. (腰塚・東1997) 14. (能登ほか1982) 15. (徳江1985) 16~20. (松田1985) 21~29. (折原1992) 30・31. (下城正ほか1997) 32. (小島ほか2003) 33・34. (田中2002) 35. (坂口・赤山1982) 36. (松村1980) 37・38. (島田1994) 39. (島田1996) 40. (石塚・中里1996) 41. (小宮ほか2000) 42. (車崎1984) 43~48. (綿貫2004)
図6: 49~64. (綿貫2004)
図7: 1. (五十嵐ほか1979) 2~6. (飯塚・田口1981) 7~20. (飯塚ほか1989) 21. (関口・鷺谷1994) 22~24. (巾1980) 25~31. (荒巻ほか1982) 32~34. (田口1988) 35. (腰塚・東1997) 36・37. (宮田1996) 38. (小宮ほか2000) 39. (車崎1984) 40. (井上1993)
図8: 1. (大塚ほか1987) 2・3. (久保・篠原1986) 4~12. (平野1984) 13. (石坂1983) 14. (徳江1985) 15. (須田2001) 16~24. (石坂1986) 25~32. (綿貫2004)
表1・2: 筆者作製